

# オゴノリ育成試験

(日本水産資源保護協会 漁村研究実践活動助成事業)

大島支庁 林務水産課

## 【背景・目的】

奄美地域では、おごのりはスーナなどと呼ばれ、塩漬けなどで食される高級食材である。しかし、近年、食害や乱獲等により資源は減少している。このため、水槽内での育成手法を確立し、養殖手法の確立とともに、増殖用母藻の安定確保を目指した。

## 【普及の内容・特徴】

今回の取り組みは、海ぶどう養殖業者を中心にした奄美海藻養殖研究会とともに日本水産資源保護協会の助成事業で行った。2種類のオゴノリ藻体を裁断後、籠内で育成する手法を検討した。また、配偶体や孢子体によりロープなどに採苗する手法も検討した。

## 【成果・活用】

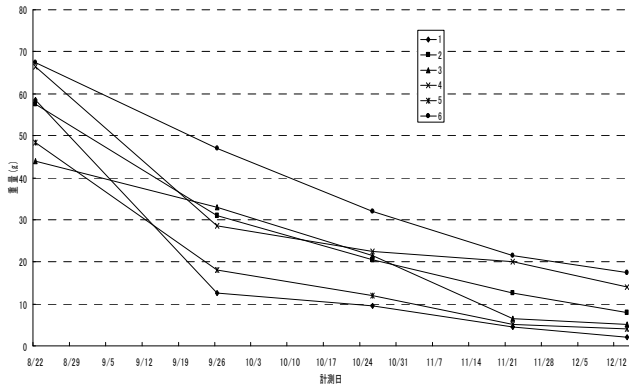
クビレオゴノリ：平成24年3月の育成当初から雑海藻の繁殖が激しかったものの、新芽の生長が確認できたが、水槽収容ほぼ3ヶ月後には枯死した。この時期は海域でも藻体が消失する時期であるが、雑海藻の繁殖を抑えることができれば、藻体を維持することはできると考える。また、収容していた籠の側面には、新たな藻体が生長していることが確認でき、比較的容易に採苗が可能と考える。なお、ロープに挟み込んだ藻体はすべて枯死した。海ぶどう用のトリカルネットに直接3月頃に採苗し、海ぶどう最盛期後まで海域で養生し、冬期に海ぶどう水槽に移設し、翌3月頃に収穫、以後は海ぶどうと入れ替えることにより、海ぶどう閑散期の収入源になると考える。

ユミガタオゴノリ：8月22日から籠を水槽上部に設置して44.0～67.5g/籠で開始したが、約4ヶ月後の12月14日には2.0～17.5g/籠に藻体の重量は減少した。また、12月14日から籠を水槽底面に設置して開始した試験は、約3ヶ月後の3月19日にはほとんど変化はなかったが、3月は2月に比べ増加した籠が多かった。

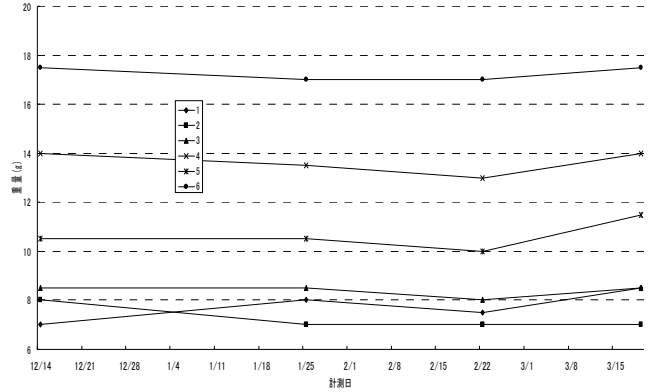
海域では晩夏～初冬は消失している時期であることに加えて、育成中水槽に海藻を食べるヨコエビは常時多数生息し、また、アメフラシなどの発生も見られ、重量の減少はそれらの影響を受けたと考えられたが、消失時期でも藻体の維持はできた。約20gを上回る2月からは藻体の生長が見られ、その後さらなる増重が予想されたが、海ぶどうと盛期が重複してしまうため、養殖種としては単価的に高い海ぶどうに劣るが、海域に展開して増殖させる種には向いていると考えられる。なお、籠の底面に設置したサンゴ片及びロープには、藻体は確認できなかった。

## 【その他】

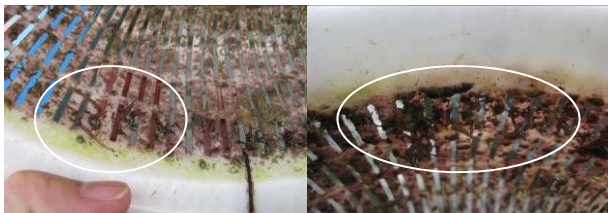
クビレオゴノリは、沖縄県の報告（瀬底正武，平成12年度水産業改良普及活動実績報告書）でも、最終的には収穫前に食害にあったことが記載されているように、海域で行った場合は食害対策が必要になる。



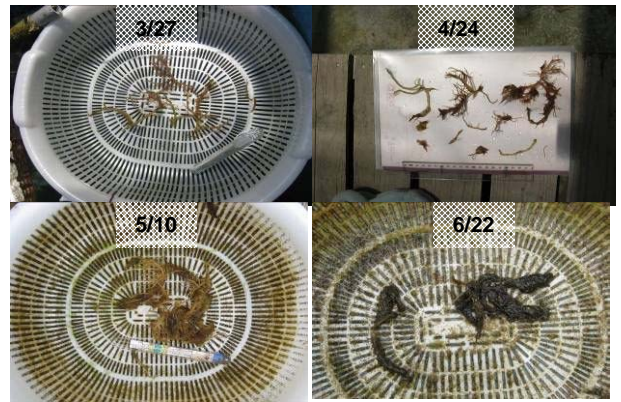
オゴノリ重量の推移(1回目)



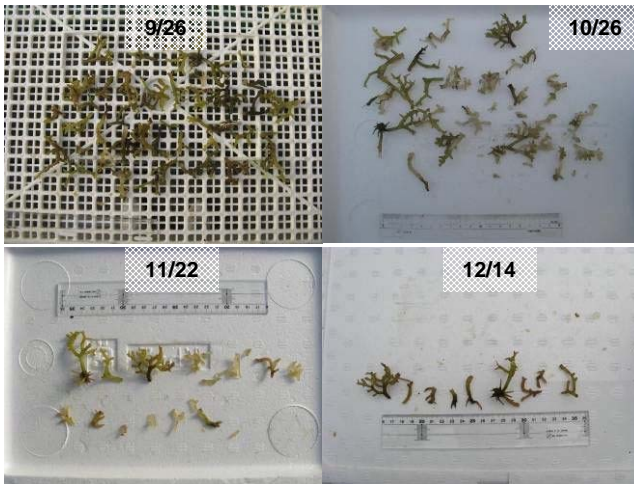
オゴノリ重量の推移(2回目)



ケレオゴリを收容していた籠側面に確認できた新たな藻体



ケレオゴリの経時的変化



ユガトゴリの経時的変化(1回目)



ユガトゴリの経時的変化(2回目)